

### 大学が大学であることを取り戻すために 大学－附属連携研究の展開と可能性

教育システム研究開発センター員  
天ヶ瀬 正博(文学部助教授)

大学の複数の学部から研究者が集まり、附属学校園と連携して一つの研究を行う。その可能性にいまわたしたちは挑んでいます。小規模大学でありながら幼稚園以後すべての校園がそろっていることをメリットにするのです。また、教員養成系大学でないことが特色ともなります。それは研究組織の創りやすさ動きやすさであり、研究テーマの差異化や多様化であると言えるでしょう。このような大学は他にはそうありません。学界、教育界、そして、社会に対して、独自の役割を果たすことができるのです。では、どのような連携研究をすればよいのか。それが問題となります。

言うまでもなく、大学とその附属校園は研究施設であり教育施設であります。その人材は研究者であり教育者であります。そうである以上、連携研究では教育という研究テーマがもっとも取り組みやすいのは当然の成り行きです。また、大学の社会貢献という点においても、教育における貢献は大きな部分を占めています。今後その他の連携研究テーマを創出するにしても、当面はこれで行くしかありません。では、だれがそれをするのか。これが次の問題となります。

大学は最高学府すなわち教育の最高権威であると言われてきました。それを自認するのなら、大学は教育全体に対してそれ相応の責任を果たさねばなりません。子どもたちが何のために何をどのように学ぶべきかとうことにそれ相応の責任をもたねばなりません。それは、いかなる専門研究に従事していようと、「大学人」ならば等しく負っている責任ではないでしょうか。政治家や経済人がマスコミを通じて教育を云々しているのに、大多数の「大学人」がほおかむりをして黙っているのでしょうか。

「教育の研究が専門ではない」あるいは「自分の教育に自信がない」などと言って、慎重深く遠慮することはありません。教職者が教員養成系大学だけでまかなわれてよいはずはないし、ましてや、子どもたちが何のために何をどのように学ぶ

かということを経験系大学や教育研究の「専門家」たちだけにゆだねておいてよいはずはありません。例えば、薬師寺や法隆寺などの再建を担った棟梁西岡常一（『木に学べ』など）や奈良女子大学の誇る数学者岡潔（『春宵十話』など）にはその道の専門家にしかできない教育論を見ることができます。適材適所とはどういうことか。教育における教師の存在はどのようなものであるか。それらのことに彼らは「非専門家」でありながら深い洞察を示しています。

ただし、学問を究めた「大学人」であれば、たかだか一つや二つのペーパー・テストの結果で「学力低下」などと声高に叫ぶようなことはしてはいけません。あたかも下請け会社に注文を出すかのように、高校までの教育に責任を押しつけるのもいけません。さらに、自らが課した試験をかいぐってきた学生たちについて、例えば、分数すらできない者がいるなどと本気で信じてはいけません。附属校園があるのであれば、そんな短絡的なことはしないでしょ。連携すればよいのですから。

私は、「非専門家」でありながら、2003年から文部科学省の科学研究費補助金・特定領域研究「新世紀型理数科系教育の展開研究」に参加し、大学－附属の連携研究の一端を担っています。理学部と文学部から、この分野について「非専門家」の複数の教員に研究協力を得ています。そのなかで、大学の教員たちが教育全般に対して自らの経験からにじみ出た独創的で唆深い考えを持っていることを知りました（詳しくは、奈良女子大学教育システム研究開発センター紀要『教育システム研究』第2号をお読みください）。幼稚園や、小学校や、中学校や、高等学校の教員たちと、そして、もちろん大学の教員同士で教育について語り合い、連携して研究したとき、大学が社会に対して本来担っている重要な役割を果たすことができることを確信しました。

## 附属幼稚園「全国かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校」に指定

平成17年度、附属幼稚園は、国立教育政策研究所から、「全国かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校」に指定されました。

### 1. 調査の内容

調査目的：幼稚園教育要領のねらいの実現状況把握のため、幼稚園における教育課程の実施状況の調査を行う

調査対象：年長児（学級全体、観察対象児男女各1名、計2名。観察対象児は、観察対象クラスの中に位置する9～11月生まれの子どもとする）

調査期間：第1回目 平成17年6月13～17日  
第2回目 平成18年2月13～17日

調査方法：担任が保育を行いながら、随時記録や観察を行う。

### 2. 調査の実際

それぞれの調査期間の前週に、その週の子どもの活動を振り返り、教育課程や指導計画を参考にしながら、子どもの興味や実態に合わせて、ねらいや活動計画を立て、環境を整える。幼稚園のあらゆる環境の中から子どもが自由に選択して遊んだり、友達と一緒に活動を楽しんだりする姿をとらえて記録する。

まず、毎日の記録については、保育終了後すぐに、学級全体および観察対象児それぞれについて、観察メモをもとに記憶に残ったエピソードを記録する（A票）。次に、遊びに取り組む場面、学級全体で行動する場面、生活行動をする場面ごとに1週間のまとめをする（B票）。A票、B票をもとに、副園長が学年主任および担任と話し合いながら、総括票（C票）のa～gの視点に相当する子どもの姿を書く。

その後、副園長、指導員が読み取り表を作成し、調査実施前に作成した教育課程の編成や実施状況（D-I票）と比較して、ねらいの実現状況を判断する（D-II票およびE票）。

以下、各票の項目内容である。

#### B票（1週間のまとめ）

- A. 幼児が一人で行動する場面で
- B. 友達と行動する場面で
- C. 先生とかかわる場面で  
（以上、遊びに取り組む中で）
- D. 学級全体で行動する場面で
- E. 生活行動をする場面で

#### C票（総括票）

B票のA～E項目ごとに、

- a. 心の動き
  - b. からだの動き
  - c. 周囲の事物への働きかけ方
  - d. 周囲の人々とのかかわり方
  - e. 考えたこと、感じたことの表現の仕方
  - f. 健康や安全、生活上のきまりに対する理解や態度
  - g. その他
- の視点でとらえる。

### 3. 調査を通して得たこと

- ・保育者のもつ視点で子どもの成長が左右されるという意識をもっていないと、子どもの成長を見過ごしてしまうことが多いと改めて実感した。
  - ・附属小学校や大学教員ともカンファレンスを行い、いろいろな見方、考え方について知ることができたことで、大切にしたい学びや育ちの願いがより子どもに添ったものになることを感じた。
  - ・一つ一つのエピソードを掘り下げて丁寧に「看と」ることの大切さや、担任がとらえたことを第三者にわかるように記述することの重要性を感じ、今年度の公開保育研究会で「子どもの看とりから記述へ、記述から評価へ—保育現場における子ども理解のサイクル—」というテーマでシンポジウムを行うことができた。
  - ・子どもの成長のとらえ方や記述の仕方について勉強できたことが、幼稚園で研究している「個人ファイル」作成の参考となった。
- 現在、最終のまとめをしているところである。



## 附属小学校「公開意見発表会」

小学校では「確かな力を培う学習法」をテーマに、「奈良の学習法」で培われる「確かな力」とはどのようなものなのか、子どもたちの確かな力をどのように育てていけばよいかを研究しつつ、特に「学びの基礎・基本と自律的な学び」に焦点を当ててきました。具体的には、「各種能力の指導系統表」を見直し、「学習力を育てるすじ道」と名称を改め、現在改訂作業を鋭意進めているところです。

小学校単独ではなく、附属学校部や教育システム研究開発センターと有機的な連携を意図して進められました。その一部が「公開意見発表会」です。公開意見発表会は、附属学校部と教育システム研究開発センターの後援を得て開催されました。

### ■公開意見発表会①

9月15日（木）4時30分～6時

発表者 金津 琢哉

テーマ：書く力の個性的充実とは何か

発表者 太田 誠

テーマ：子どもの自律を育てる算数的学習法

参加者 水上附属学校部長、内田教育システム研究開発センター長、中島附属幼稚園長以下3名、野口附属小学校長以下16名、植野附属中等教育学校長以下4名、教育システム研究開発センター員（天ヶ瀬）

### ■公開意見発表会②

9月29日（木）4時30分～6時

発表者 小幡 肇

テーマ：「子どもによる授業」の改善

発表者 杉澤 学

テーマ：知的好奇心の萌芽と学級文化

参加者 水上附属学校部長、内田教育システム研究開発センター長、幼稚園3名、小学校17名、中等教育学校2名、教育システム研究開発センター員（本山、天ヶ瀬）、その他（三重大学森脇）

### ■公開意見発表会③

10月27日（木）4時30分～6時30分

発表者 堀本 三和子

テーマ：子どもとつくる食の学習を考える

発表者 阪本 一英

テーマ：個の追究を学習集団の中で生かす

参加者 水上附属学校部長、内田教育システム研究開発センター長、幼稚園1名、小学校16名、中等教育学校4名、教育システム研究開発センター員（本山、天ヶ瀬）

### ■研究プロジェクト報告会

11月8日（木）4時30分～6時

講師 鮫島 京一（附属中等教育学校・教育システム研究開発センター専任）

テーマ：方法としてのメディアリテラシー

～新しい学校教育を構想するために～

参加者 水上附属学校部長、幼稚園9名、小学校15名、中等教育学校1名

一人一人の児童の伸びゆく姿を語り合い、児童相互あるいは児童と教師の育ち育てられる関係性に光を当てようとするとき、附属学校園の職員がお互いを真のパートナーとして認め合い、真剣な共同作業が成立することでしょう。

平成17年度は、新しい組織的連携体制づくりに向けて一歩を踏み出したと言えます。この第一歩を来年度以降、どのように力強く歩み進めていくのか、センター員と附属学校部研究部会の先見性と視野の広さが一層問われることとなります。



## リベラルエデュケーション・プロジェクト活動報告

### 摂津市立味生小学校公開研究会における講演 鮫島京一（附属中等教育学校・センター員）

2006年2月10日  
16:00～17:30

#### 講演タイトル

「新旧ドラえもん比較、  
あるいは情報化社会に  
おける言葉の役割」



情報技術のめまぐるしい発展は、子どもたちにもどのような影響を与えているのだろうか。新旧「ドラえもん」（新「ドラえもん」は2005年から放映）の比較を手がかりに、情報化社会における言葉の役割を考えてみる——これが講演の趣旨であった。講演は二部から構成されていた。第一部は、新旧「ドラえもん」の比較である。「タイムふろしき」という話をとりあげ、両作品に共通する一場面のシーン展開とせりふを比較した。第二部は、新旧「ドラえもん」における差異を、言葉の役割をめぐる問題とつなげて考えてみることであった。講演では主として以下の4点を論点とした。

#### (1) 「ライセンスなき情報化社会」（中等教育学校・勝山副校長）という現状

車を運転するには免許がある。しかし、情報技術を使うために免許はいらない。情報技術使用には、「情報倫理」に照らし合わせた判断が必要とされる。しかし、情報化社会の現状は、ちょうど、無免許で公道を「爆走」しているようなものである。「ライセンスなき」とは、共有されるべき価値規範が未形成のままに情報技術が普及している現状を指している。

#### (2) 新旧「ドラえもん」における言葉（せりふ）の比較（右の表を参照）

新旧「ドラえもん」を比較した場合（取り上げたものに限定するが）、①大人の会話が感情的になっていること、②せりふが短くなっている、あるいは言葉そのものも減少していることがわかる。情報化社会では、より速く効率よく伝えることが求められるため、複雑な現象や状況の単純化が行われる。ところが、現実社会や人間存在はますます複雑になっている。ものごとを理解するためには、情報を読み解き、的確に判断する力（メディアリテラシー）が要る。それが未形成のままに、

子どもたちは情報化社会に投げ込まれている。その結果、人間関係や社会関係の希薄化や弱体化が進んでいるのではないか。

#### (3) 情報化社会における言葉の役割とは？

言葉の役割は大きく三つある。コミュニケーション、ものごとの認識、そして芸術（文学）である。ところが、現状では、コミュニケーションばかりが強調されている。コミュニケーションは重要である。しかし、それ以上に、人間の「認識」における言葉の役割が大切ではないか。「認識」とは、ものごとを理解し、判断することである。情報化社会の中で、ますます重要になってくるのは、「認識」という言葉の役割である。

#### (4) センターのリベラルエデュケーション・プロジェクトの射程

インターネットに象徴される情報技術の日常生活への浸透が、人々の個性や創造性を保障するというよりもむしろ、多くの社会問題を引き起こしている。あるべき情報化社会の担い手となるために必要とされる学力がメディアリテラシーである。センターのリベラルエデュケーション・プロジェクトがメディアリテラシーという言葉キーワードとしているのは、情報化社会の進展に伴う社会問題を教育問題ととらえているからである。

#### 「とんだタイムふろしき」(1996年1月5日放映)のせりふ

のび太・ドラえもん(パパとママをみて)「あーっ」  
 パパ「だからねえ」  
 ママ「だからじゃありませんよ。ゴルフクラブなんかより洗濯機のほうが大事ですよ。毎日使うんですから」  
 パパ「修理してもらえばいいじゃないか、電気屋さんをよんで」  
 ママ「パパのほうこそ、壊れてもいけないのに」  
 パパ「たまには贅沢させてくれよ」  
 ママ「家にはそんな余裕はありません」  
 パパ「そんなこというけど、ゴルフクラブのほうが洗濯機よりも古いだろう」

#### 「タイムふろしき」(2005年5月3日放映)のせりふ

のび太(ドラえもん)とパパとママのいる部屋のドアを開けるなり「ねえ、ほんとにもうだめだよ、あのテレビ」  
 パパ(のび太の声に耳をかさず、ママに向かって)「カメラだ！」  
 ママ「洗濯機ですっ！」  
 パパ「もう、シャッターの調子が悪いんだよーっ」  
 ママ「洗濯物は毎日でのよ！」  
 パパ「写真は撮りたい時に撮ってこそ、その時の記念になるんだよお」